

法然浄土教における伝統と自証について

——特に観經疏を中心として——

坪 井 俊 映

一 往生要集における善導釈書

正倉院文書並びに平安時代の初期に入唐した留学僧の請来目録等によると、善導の代表的述作とされる五部九卷の書はすべて本邦に伝来されたことを知ることができる。しかしながらこれらの疏章の伝来が直ちに教説の弘通に連なるということはできず、善導の述作が本邦の浄土教家に注目されるようになった初めは源信の『往生要集』とすべきであろう。

『往生要集』は末尾に「問何等教文念佛相応スルヤ 答如ニ前所ノ引西方証拠ヲ 皆是其ナリ」¹といつて、引用する九百余部の經論釈書の中より、特に重視するものとして、『観無量寿經』『雙觀（卷）無量寿經』『觀佛三昧經』『般舟三昧經』等の經典を出し、ついで

修行方法多在摩訶止觀卷十及善導和尚觀念法門並六時礼讃各一

といつて、智顗の『摩訶止觀』善導の『觀念法門』と『六時礼讃』（『往生礼讃』）を中心に修行の方法を説くとしている。

『往生要集』は「導和尚云」「導禪師云」として『観念法門』に四例、『往生礼讃』に九例の引用文が見られる。このうち『観念法門』は『往生要集』大文第四正修念仏門の觀察門に説く別想観の解説に二例を用い、大文第六別時念仏門に説く尋常別行の念仏三昧と臨終における見仏の解説に二例を引用している。『往生礼讃』は九例のうち、初めは引用文ではないが、五念門の礼拝門の解説に礼拝の広行としてあかしているが、それ以外の大例は大文第五助念方法門の第二修行相貌において四修三心の説明に引用し、後の二例は専称名号と五念門（称念を収む）の百即百生を説くに引用している。そして『往生礼讃』は初めに

問曰 今欲^ニ勸^ル人往生^ニ者未知 若爲安心起行作業^ニ 定得^ニ往生彼国土^ニ也

と問を出して、安心として至誠心等の三心、起行として五念門、作業として四修を説き、ついで「識颺り神飛で観の成就し難きもの」には称名をすすめている。この往生業の構想は『往生要集』と同じであって、大文第四正修念仏門では往生業として五念門を説き、観念に堪えざるものには三想（帰命想、往生想、引接想）による称念をすすめ、そして観念を助成するために第五助念方法門において四修と三心をあかしている。『往生要集』の助念方法門では助念の行として詳細な解説をしているが、三心と四修は重要な助念の行といっているから『往生要集』に説く浄土往生業の構想は善導の『往生礼讃』前序に説く考えによるところ大なるものがあるといえることができる。法然の『無量寿経釈』に「恵心意於^ニ西方行^ニ以^テ善導和尚而爲^ニ指南^ニ云云」とあるはこの辺の事情をいうものと思われる。

このように『観念法門』と『往生礼讃』とは主として、観念と称名に関する解説に原文をそのままに引用している（多少の具略がある）が、『観経疏』については全て取意した文か、要旨を略記するだけで『観念法門』や『往生礼讃』の引例のように原文をそのまま引用したところは見出せない。『観経疏』では玄義分に二例、散善義に二例が見られる。玄義分の一例は第四正修念仏門の作願門の解説に引用し、第二例は第十問答料簡門の往生階位を説くところにおいて、善導の九品皆凡夫説を取意して記述している。散善義の二例のうち一例は第五助念方法門の修行相貌において

『往生礼讃』の三心釈の引文に続いて、三心は九品に通ずる文を取意して細字で註記したものである。第二は第十問答料簡門の極樂依正にて華開の七日一日を論ずる処に取意して記するものである。

これら四例のうち注目すべきものは「三心は九品に通ず」という取意の文である。それは、

略抄之 經文雖在「上品上生」如「禪師釈」者理通「九品」余師釈不能具（往生要集―淨全十五卷八九一頁、觀經疏散善義―淨全二卷五五頁以下）

この文は上記のように修行相貌において四修三心をあかすに続いて細字で註記のごとく記述されている。これは至誠心等の三心は『觀經』の上品上生にのみ説かれていたものであるが、善導の考えによると三心は九品に通じ、九品の諸行はいづれも三心を具した往生行とすべきであって、この考えは諸師の釈には見られないものであるということである。この説は善導が『觀經疏』散善義において上品上生を釈するに十一門義をもつてし、九品それぞれに十一門義があると説くところより出る説であって、散善義に

今此十一門義者約「對九品之文」就「一品中」皆有「其十一」即為「一百番義」也

とあって、九品のそれぞれに十一門義があるから都合九十九番義となるが、これを総括して一百番義と称するのである。したがって、善導の考えによると三心は上品上生の一品にしか説かれていないが、九品はすべて三心を具足した往生行を説くのである。かゝる説は善導独自の考えであって、善導以外の諸師には見ることでできないものである。また善導の他の述作即ち『往生礼讃』『觀念法門』『般舟讚』『法事讚』等にも見られないものであり、さらに善導の門人懷感の『群疑論』（往生要集には多く引用す）にも記載されていない考えである。『觀經疏』散善義にのみ記述されているものである。

したがって、『觀經疏』散善義を見ることがなくしてはかゝる記述は書くことができないと思われるから、源信はどこかで散善義を見て、この考えを記載したのであろう。しかし、上述したように、『觀經疏』の引用例は原文を記載せず、すべて取意の文であり、また四例のうち二例は「有云」「有師云」^②として人名を出していないことは注意すべ

きことである。

法然は『往生大要抄』^③に

されば善導の觀經の疏に、九品の文を釈するしたに、一々の品ごとに弁定三心一以為正因とさだめて、この三心は九品に通ずべしと釈し給へり。恵心もこれをひきて、禪師の釈のごときは理九品に通ずべしとこそはするされたれ（点線筆者記）

と記されている。この「禪師の釈のごときは理九品に通ず云云」の文は上記の細註の文である。それで、法然の考えによると源信は『觀經疏』散善義の說によつて、「理九品に通ず云云」の說をなしたとしている。

しかるに良忠の『往生要集義記』第五によると、

如禪師釈者理通九品者、問禪師釈者指散善義耶、答不然……慧心亦同見玄義分不見余卷一

という。良忠の考えによると、『觀經疏』四巻のうち序分義、定善義、散善義の三巻は源信の當時はひろく流布せず、玄義分一巻のみであった。これは中国においても同様であった。それで、源信は玄義分一巻のみを見て、他の三巻は見えていない。もし広く流布しているならば、だれかが引用しているはずである。しかるに引用がないということは流布していないことであつて、源信は玄義分の一巻のみを見て、他の三巻は見えていないのである。さらにまた散善義の取意引用の第二例と見られる。

有師云以此土日夜說之令衆生知一

の文についても、良忠の『往生要集義記』第七に釈して龍興及び大師（善導）の義であるというが、しかし、「但今師不見第四卷一如上述」といって、源信は散善義を見ていないという。

これについて現今の諸学匠が良忠の「散善義不見說」を無批判にとりあげていられるのは如何なるものであろうか、法然の『往生大要抄』は元享版『和語灯録』に記載されているものであつて、醍醐本、『法然上人伝記』及び『西方

指南抄』には収録されていないが、この元享版『和語灯録』は良忠の門人望西棲了慧が生存中に、即ち元亨元年（一二二一）に刊行したものであるから、法然のものと考えてよいであろう。

したがって、法然の『往生大要抄』の説及び引用文句の内容より見て源信は『観経疏』散善義は見ていたとすべきであろう。良忠がことさらに「不見第四卷」説をなしたのは、『往生大要抄』の存在を知らなかったことにもよるが『往生要集義記』第五に、

末法之節、^{イニ}辺地之境具開^ニ四卷^ノ疏、^{イニ}伺^ニ一宗^ノ趣、^ハ非^ニ宿殖^ニ淨土^ノ因^ヲ、^リ何得^ニ値遇^ニ習学^ニ、^{スル}華哉幸哉

といっているように法然と『観経疏』との出合いを意義づけるために「不見第四卷」説がなされたのではないかと思われる。しかし、この『観経疏』の文が『往生礼讃』や『観念法門』のように原文をそのまま引用せず、上述のようにすべて取意の文として記述していることは注意すべきことであって、『往生要集』述作の当時には、源信の手元に『観経疏』がなく、かつて見た記憶によって取意を記述したためにかかる「不見第四卷」説が生れたのでないかと思う。源信の当時には叡山に『観経疏』は全巻伝わっていなかったであろう。そののち、いつ頃かあきらかでないが南都よりこれが伝わり、法然はこの疏によって浄土一宗を開創した。『四十八卷伝』に『観経疏』が天安二年、円珍によって請来されたごとく記述していることは、本疏が浄土開宗について重要な書であるにかかわらず、叡山天台宗に伝来していない事実を覆うために、天安二年請来の説がとえられたのでないかと考えるのである。

いづれにしても、源信は『観経疏』四卷は見たとすべきである。しかし、『往生要集』の述作の時には手元になくかつて見た記憶によって意趣を記述したために全文が取意の文となつたとすべきであろう。したがって『観経疏』に対して充分な検討がなされていないために、『往生要集』の上には『観経疏』の影響はほとんど見ることができない。

さらに源信の寂後三十五年目即ち後冷泉天皇永承六年（一〇五二）書写の『西方懺悔法』一卷なる書が叡山浄土教研究の新資料として照会されている。^⑦これには善導の釈書として『往生礼讃』と『観念法門』が引用されているだけで

あつて『観経疏』は見ることができない。

二 永観、珍海の著作における善導釈書

天台宗叡山の浄土教に対して、南都の浄土教家にては『観経疏』は『往生礼讃』『観念法門』とともに注目せられ、永観の『往生十因』珍海の『決定往生集』に引用されて称名念仏往生説の解明に用いられている。

永観の『往生十因』には『往生礼讃』が二例、『観念法門』が一例、『観経疏』散善義が一例、引用され『往生講式』には歌讃として主として『往生礼讃』の偈が引用されている。『往生十因』は初めに「念佛一行開為十因」といって、念仏による浄土往生に十種の勝徳ありとして、(一)廣大善根故、(二)衆罪消滅故、(三)宿縁深厚故、(四)光明攝取故、(五)聖衆護持故、(六)極樂化主故、(七)三業相応故、(八)三昧発得故、(九)法身同体故、(十)随順本願故の十因を説いているが、いうところの念仏とは「又何時早抛^{リツテ}万事^ニ速求^ム一心^ニ」依^リ道綽之遺誡^ニ火急^ニ称名^シ順^{シテ}懷感^ノ旧儀^ニ励声^ニ念佛^シ云云」とあるように無常観に立つて一心に励声念仏することである。

この十因のうち善導の著作を引用するのは(一)廣大善根故の項にて四修の説明に『往生礼讃』の文を二例、(五)聖衆護持故の項に『観念法門』の五種増上縁義に説く現生護念の文、(八)三昧発得故の項にては『観念法門』の見仏の文を引用している。しかしこの『観念法門』に説く見仏は定心三昧と口称三昧による見仏を説くのであるが、『往生十因』では定心三昧の文が除かれている。これは『往生十因』が称名念仏を重視するところより意図的に除いたのでないかと思う。『観経疏』散善義の文は(十)随順本願故の項に引用されているが、内容に大きな抄略がある。いま煩をいわず、散善義の原文を出し、『十因』が引用する文は横棒線を記して示す、

然行有^ニ二種^一 一者正行 二者雜行 言^ニ正行^一者專依^ニ往生經^一行^レ行者 是名^ニ正行^一何者是也 一心專誦^ニ誦此觀經^一弥陀經無量壽經等 一心專^ニ注思^一想^ニ觀^一察^ニ憶^一念^ニ彼國^一二報莊嚴^一 若礼^{スレバ} 即一心專^ニ礼^一彼佛^一 若口称^{スレバ} 即一心

專ニ稱彼佛ヲ 若シ讚歎供養スルニハ 即一心讚歎供養ス 是名為正ト 又就チ此正中ノ中ニ復有ニ二種ニ 一者一心專ニ念弥陀名号ヲ 行住坐臥不問ニ時節久近ニ念々不捨者ニ是名正定之業ニ 順ニ彼佛願ニ故 若依テハ礼誦等ニ即名為助業ニ 除ニ此正助ニ行ヲ 己外ノ余諸善悉名ニ雜行ト (横棒線は十因に引用の文)

とあり、一心專念の行が本願に順ずる行であるとしているが、この本願に対する釈義が法然とは異なる。このように『往生十因』は善導の『往生礼讃』『観念法門』『観經疏』散善義の文を引用して称名念仏の解説に資しているが、注意すべきことはこれらは観念の説明には引用されず、主として称名に關して引用していることである。

珍海には淨土教に關するものとして、『菩提心集』二卷、『安養知足相對抄』一卷、『決定往生集』二卷の著作がある。そのうち『決定往生集』には十四例が見出される、即ち『観念法門』が八例、『往生礼讃』が二例、『観經疏』定善義が二例、『同』散善義が一例、出拠不明が一例^⑧ある。

『決定往生集』は初めに、称念をすすめるについて、「称念弥陀之行愚智共從 良以契時称機故」といって、称念の行の時機に契うものであり、愚者智者ともに従うべき教であるといつて讚じ、「欲安心於決定往生快期於終焉来迎矣」といって、決定往生の安心を確立して臨終の来迎を期するものであるという。そして初めに決定往生について教文、道理、信心の三を説き、「無疑は即ち信なり 決定の称なり」といい、ついで信心について果決定、因決定、縁決定の三をあかし、「分ニ此三ニ更為十門ト」といつて十決定をあかしている。その十決定とは、(一)依報決定、(二)正果決定、(三)昇道決定、(四)種子決定、(五)修因決定、(六)除障決定、(七)事縁決定、(八)弘誓決定、(九)撰取決定、(十)円満決定である。

このうち善導の釈書を引用するのは初めの信心を釈する中の「縁決定」に『観念法門』の五種増上縁義に説く証生増上縁の文。(二)正果決定には定善義の合華往生の文と『往生礼讃』の雜修不往生説及び無量宝幢説(出拠不明)の文。

(三)昇道決定にては『往生礼讃』の三心釈中の深信釈の文。(五)修因決定にては、『観經疏』散善義の就行立信釈に出ず

る正雜、助正二行説の文。『観念法門』の五種増上縁義に説く現生護念増上縁の文。同じく三念力見仏の文。同じく見仏三昧増上縁の文。同じく『観念法門』の道場における三昧法。定善義に説く仏身の観法。『観念法門』の観仏三昧の法及び同書の別相観法等の八例がある。(九)除障決定には『観念法門』の五種増上縁義の現生護念増上縁に関する文等の十四例である。

これらはいづれも凡愚の浄土往生業を説くところに引用されている。そして注目すべきことは(四)修因決定において「発菩提心為業主」といつて、菩提心をおこして行ずる往生の正業に善導が『観経疏』散善義の就行立信釈の下に出づる五正行、正助二行説を引用して、正業とし、称名を正中の正なりと論ずるときは、善導の五正行説をそのまゝ受け容れているのであるが、法然の理解とは異なるもののあることは注目すべきことである。さらに続いて説く修行相において正業(称名)を修するに長時と別時の二種をあかし、長時には『観念法門』の日別念一万の文を出し、別行にては口称による見仏を説き、続いて『観念法門』にあかす道場の行儀及び観仏の方法によって別時の行法をあかしている。このように『決定往生集』にとく往生業は善導の考えに依存するところ大なるものを見るのである。この『決定往生集』は多くの經典、中国の祖師釈書を随時引用して往生業の解明に資しているが、善導については上記のごとく十四例が見られ、仏願力増上縁、三心釈中の深信釈、正助二業、観仏三昧、現生護念等の文に注目し引用しているのであつて、珍海は善導をもって往生業として観仏、称名を説く先達と見たのであろう、しかしかれのいう称名は第二十願による称名であつて、法然のそれとは異なる。

三 「一心専念」の文について

善導の『観経疏』は上記のように源信、永観、珍海等の浄土教家の注目するところであり、さらに隆国の編集した『安養集』、中ノ川実範の『念佛式』等にも引用されているが、法然が善導浄土教に回心する直接の契機となつたもの

は『観經疏』散善義の就行立信釈の中に出づる五正行にあかす「一心專念弥陀名号」の文であるといわれ、永観、珍海ともにこれを引用しているから、兩者のこの文に対する理解を出して、法然との相違を見ることにする。

上記したように永観の『往生十因』には五正行の文が大きく抄略され、一心專念の文についても「一心專念弥陀名号是名正定之業順彼佛願故 若依礼誦等即名為助業」とあって、一心に専ら弥陀名号を念することが仏願に順ずる正定の業であるとしている。『往生十因』のいう仏願（本願）とは第十八願文をさすのであるが、第十八願文に説く「至心」について、下中上の三ありとして、(一)係想不乱心、(二)勇猛心、(三)深心（法与想応）の三をとき、十念の念について、

此中云念者不_レ取_ニ此時節_一也 但言_レ憶_ニ念_{スルヲ} 阿弥陀佛_一 若_ハ総相若別相隨_ニ所觀緣_一 心無_ニ他相_一 十念相續_{スルヲ} 名_ニ為_ス 十念_ト 但称_{スルコトモ} 名号_ニ亦復如_レ是

といつて念を憶念とし、十念について

經言_ニ十念_一者明_ニ業事成升_一耳_{今云由願力故十念業成不爾本願應無勝用}

といつて、十念の十は業事成升をあかすものであるとして、憶念觀法の成就を示すものとする。そして憶念の成就は願力（第十八願）によるといい、これを「十念の願」または「十念往生願」と名づけている。

それで『往生十因』が説く第十八願とは十方の衆生が係念不乱心等（勇猛心、深心）の至心をもって、阿弥陀仏の総相別相を憶念して他相なく、憶念を成就することが十念であるとし、また称名によって憶念を成就することも十念とし、この十念を成就することは仏の本願によると、これによって衆生の往生を誓われた本願とするようである。そこで『十因』はこの文に続いて、

是_ハ故行者係_ニ念悲願_一 至心称念_{スベシ} 除_ニ不至心者_一 不順_ニ本願_一 故

といつて、至心に阿弥陀仏の本願（悲願）に念をかけて仏を憶念し、また称名を相續することを説くのであって、憶

念称名業の成就是仏の本願によるという。

したがって『十因』に引用する「一心専念弥陀名号」の文も、永観の考えによると一心に仏の悲願に念をかけて弥陀の名号を憶念し、また称名することをいうのであって、これが本願に随順する行であるとする。永観が善導の『観經疏』散善義の就行立信釈に出づる「一心専念」の文を引用するに、上記のように大きな抄略が見られることは、長文なるゆえに略したのではなく、「一心専念」が各種の行業の中で重要であり、本願の行なることを示すだけで充分と考えたために、必要な文のみを抄出したと考えるのである。この点が法然の『選択集』の考えと大いに異なるところである。

さらに『往生十因』が説く称名は善導が説く本願念仏とは異なる。『十因』は序文に無常観を説いて「無常暴風不_レ論_二神僊_一 奪精猛鬼不_レ折_二貴財_一 生死必然_{ナリ}」と説いて、無常の世にあって浄土に願生する方法として道綽の説く勵声称名を説くのであって、善導の『往生礼讃』が「識颺り神飛ふ障重の衆生」に称名をすすめるものとはその観点を異にしている。したがって、『十因』は無常の世にあるために「毎_レ眠思_二臨終_一 必唱_二十念_一」といって、日々臨終の思いで称名十念の相続をあかしている。そして、臨終にあたりては「臨終之心極_ニ猛利_一 故_ニ十念能滅_二多劫罪_一」といって、臨終における十念の重要なことを説き、さらに観念に堪えざるものには「称_二南無阿弥陀佛南無阿弥陀佛_一 声々相次使_レ成_二十念_一 若不_レ堪_二称名_一 者只作_二往生之思_一」と説いて、観念に堪えざるものは称名し、称名のできないものは往生の思いに住するだけもよいとしている。このように『往生十因』は称名を肝要な往生行としているが、「係_二念悲願_一 至心称念」する称名行であって、『往生要集』が帰命想、往生想、引接想に住する称念を説くのと同じ考えであって、憶念称名を説くものと考えられるのである。

珍海の『決定往生集』には浄土往生の業として

由此_レ応_二知若大若小_一 若定者散 若事若理 凡是善_二者皆浄土因也_一

と説いて諸善万行ともに往生の因とするが、珍海の重んずるものは菩提心と称念であって、菩提心について、

此之菩提業非但生淨土終至佛果但衆生聞佛道長遠望岸而退故示淨土延果作進趣之縁為淨土因と説いて、菩提心は仏果に至る心であるが、遠長の果であるから近い淨土往生を示して願求の縁とするという。そして「発菩提心為業主」といって、菩提心を発した上に随縁所起の業として、善導の『観経疏』散善義に説く正行雜行、正定業助業説を引用している。そして「一心專念弥陀名号……順彼佛願故」の文について、

順本願者四十八願中云聞我名号係念我国云

という。この「聞我名号係念我国」とは四十八願中の第二十願である。この願は「係念定生願」、「遠生果遂願」、「諸行往生願」、「植諸徳本願」等と名づけられている願であって、願文に対する理解の相違によってかかる異名が生じたのであるが、『決定往生集』が「一向專念弥陀名号」の行が「順彼佛願」の行であり、これが第二十願の「聞我名号係念我国」の文を出していることは「一向專念」を「一向係念」と解したのであろう。それで珍海は「一向專念弥陀名号云」の文を一向に係念称名の行を相續することが本願（二十願）に随順する行なりとしたようである。

そして称念相續について、修行相において『観念法門』の「日別念弥陀佛一万畢命相續者即蒙阿弥陀佛加命」といって日毎の係念称名をあかし、別時の行業として、『観念法門』によって「心口称念更無雜想」念々注心声声相續「心眼即開得見彼佛」といって心口称念の行を説き、また『文殊般若經』によって「捨諸乱意係心一佛」不観相貌「専称名字」即於念中得見彼阿弥陀佛及一切佛」と説いて称念の方法をあかしている。即ち『決定往生集』のいう称念とは「称」は称名であるが「念」は「心を一佛に係ける」係念であって、仏及び淨土に思いを係けることをいうのである。そして、この行が第二十願に順ずる行とするのである。

永観、珍海のかかる解釈は念仏の「念」十念の「念」を観念、想念、係念と解し、称名をも含んだものと理解する

ところより出るものであるが、この称名は劣り観念係念は勝れたものとするのが当時一般の釈義であったと思われる。永観、珍海より時代は降るが、法然の晩年に南都より念仏停止を訴えた『興福寺奏状』を見るに南都仏教者の念仏観の一端を伺うことができる、その第七誤念仏失に

先所念_ニ念佛_一有_レ名有_レ体 其体中有_レ事有_レ理 次付_ニ能念之相_一 或口称或心念 彼心念中 或繫念或観念 彼観念中自_ニ散位_一至_ニ定位_一 自_ニ有漏_一及_ニ無漏_一 浅深重々前劣後勝 然者口唱_ニ名号_一不_レ観不_レ定 是念佛之中粗也浅也といつて、念仏には口称と心念の二あり、念に繫念と観念があり、散位、有漏の観念は浅く、定位、無漏の観念は深いものである。しかるに口称名号は不観不定の行であるから、粗浅のものであるといふのである。さらに善導については上の文について、

善導和尚発心之初 見_ニ淨土圖_一難云 唯此観門定超_ニ生死_一 遂入_ニ此道_一発_ニ得三昧_一 定知彼師自行_ニ十六想観_一也 念佛之名兼_ニ観与口_一 若不_レ然者 作_ニ観経疏_一亦作_ニ観念法門_一 云_ニ本経_一云_ニ別草_一題目何表_ニ観字_一哉

といつて、善導は十六想観を行じて三昧を発得された師であり、『観経疏』『観念法門』等の書はいづれも観念の念仏を説くものであるとする、そして称名については

而観経付属之文 善導一期之行 唯在_ニ仏名_一者誘_ニ下機之方便也

と説いて、口称念仏をすすめるのは下根のものを誘引する方便のものであるという。このように『興福寺奏状』の説く善導は観仏三昧によつて三昧を発得された人師であり、観念の念仏を説くのが主意であつて、称名は下機を誘引するために説かれたものとするのである。

かかる善導観、念仏観は南都浄土教家一般の考えであると思われる。

かかる南都の善導観、念仏観の中にあつて、『観経疏』をあまり重視しない天台浄土教において『観経疏』に注目して、口称念仏が本願念仏であるとして新しい意味を与え、従来重視されていた観念を軽視して無観称名を説いたと

ころに法然の独自の自証が見られるのである。

四 自証の念仏

伝歴によると法然が幼少の頃より青年時代にかけて師事した学僧に、菩提寺観学、持宝房源光、功德院皇円、慈眼房叡空等が天台宗の人師であり、三論宗藏俊、同じく寛雅、華嚴宗の慶雅、律宗の実範等の人々は奈良遊学にあたり教えをうけた学僧である。この中で浄土教に関係のある人は『念佛式』を著わした中ノ川実範と天台宗叡空とであるが、法然が中ノ川実範より受けられたものは浄土教ではなく鑑真和尚相伝の戒法である。^⑩ また叡空については『浄土法門源流章』^⑪に

黒谷叡空大徳伝『持此集』(往生要集)成『弁浄業』

とあるごとく、『往生要集』について造詣の深い学匠ではあるが、善導の念仏については縁の薄い人である。

したがって、法然が善導『観経疏』に説く「一心専念弥陀名号」の文によって善導が説く本願念仏の教えに帰入したといっても、法然に直接善導の教えを伝え、また本願念仏の教えを説いた人師は一人もないのである。法然はひとり『観経疏』によって善導が説く本願念仏の教旨を自証されたのである。この点より法然の念仏の教えは無師独悟であるといえる。

この時の状況を醍醐本『法然上人伝記』^⑫には

爰煩_レ出離道_二身心不安_一 抑患心先徳造_二往生要集_一 勸_二濁世末代道俗_一……但於_二百即百生行相_一者已讓_二道綽善導_一
釈_二委不_レ述_レ之_一 是故往生要集為_二先達_一而入_二浄土門_一 闕_二此宗奥旨_一於_二善導_一二反見_レ之思_二往生難_一 第三反度得_レ
乱想凡夫依_二称名行_一可_二往生_一之道理_一 但於_二自身出難_一已思定畢

とあって、三回善導の積書を見ることによって、乱想の凡夫が称名の行によって浄土に往生する道理を知ったという。

また法然は初めより浄土宗なる新宗派を開創すべく計画的に教義体系を組織したのではなく、自己一身の出難生死のために教法を求めて遍歴されたのであって、その求道の最後に遭遇されたのが善導が『観経疏』において説く本願念仏の教えである。これについて聖光の『徹選択集』に法然の言葉として、

出離之志至深之間 信諸教法修諸行業 凡佛教雖多所詮不過戒定惠三学……然我此身於戒行不持一戒一於禪定一不得之 於智慧一不得断惑証果之正智……悲哉悲哉 為何為何 爰如予者已非戒定惠三学之器 此三学外有相応我心之法門 有堪能此身之修行耶 求万人之智者訪一切之学者無教之人無示之倫云云

とあって、三学非器、乱想凡夫たるわが心に相応する教えを求め、わが身に堪えたる修行を求めて修学されたのである。そして求道修学の最後に遭遇されたのが善導の『観経疏』に説く本願念仏の教えである。

それは善導が『観経疏』の末尾に観経の意図要旨を説いて、「上來雖説定散兩門之益 望佛本願意在衆生一向専称弥陀佛名」と説いて一向専称が「望佛本願意」の行であり、観経の意図とする処であるとし、またさらに「一心専念弥陀名号」が「彼佛願に順」ずる行とする。しかしながら、善導の五部九卷(法然当時は四部八卷)の中に法然が理解したように第十八願が称名念仏による往生を誓われた本願であると明確に教示する文は見出されない。五部九卷の述作の中で、第十八願文を解釈して、これが称名念仏往生を誓われた本願であると明確に示す解釈は見られないのである。しかしながら『観念法門』の五種増上縁義に説く撰生増上縁に八縁を説く中の初めに^⑬

又言撰生増上縁者 即如無量寿經四十八願中説佛言若我成佛 十方衆生願生我國 称我名字 下至十声 乘我願力 若不生者 不取正覺

とあり、具体的にこの釈義が第十八願文の意を転釈したものとする表現は見る事ができないが、この第六縁に
又如四十八願中説云設我得佛十方衆生發菩提心修諸功德至心發願欲生我國臨命終時我不與大衆現其前者

不_レ取_二正覺_一此亦是攝生増上縁

と説いて第十九願(文に多少の具略がある)を出し、さらに第七縁には第二十願を記し、第八縁には第三十五願を出しているところより考えて初めの「若我成佛十方衆生願生我國称我名字下至十声云云」の文は第十八願文の転写であることが推定されるが、上述したように第十八願文に対する明確な釈義は見出すことができない。

また『往生礼讃』においても、^⑮

又如無量寿經云_二若我成佛十方衆生称我名号下至十声若不生者不取正覺彼佛今現在世成佛当知本誓重願不虛衆生称念必得往生_一

と説くが、この「若我成佛云云」の文が第十八願文の意を記したものであるという明白な釈義は見出すことはできない。上記の『観念法門』の五種増上縁義に説く攝生増上縁の文より推定するだけである。^⑯

これが『無量寿經』の第十八願文に対する善導独自の釈義であると明確に教示したのは法然の『選択集』第三念仏往生本願篇をまたねばならない。換言すれば善導が『往生礼讃』『観念法門』『観経疏』等に説く本願念仏(称名)の説をとりあげて、これが第十八願のことであると明白に指示したのは法然である。

法然が三学非器乱想凡夫たる自身に相應する法門を探索し、堪えたる修行を求めて、ついに善導の『観経疏』に説く「一心専念弥陀名号……順彼佛願故」の文によって本願念仏の提唱者になったということは『観念法門』『往生礼讃』に説く「若我成佛十方衆生云云」の釈が第十八願文の釈義であり、称名念仏による往生を誓われた本願であることを自証されたことによるのである。この自証された本願念仏は善導が五正行(就行立信願)の中において正定業とするものであり、観念を軽視して助業とするものである。そして、この本願念仏の教えこそ、釈迦一代の教法の中で時機相應の教えであるとして、選取されたのである。即ち善導の教えによって本願念仏の一行のみを選び取られたということは、とりもなおさず釈迦一代の教法について三重の選択がなされたということである。法然が浄土門に帰入し

てより次第に思想信仰が進み、『三部経釈』（東大寺講説）または『選択集』述作の時にあって選択本願の思想が確立したといふときものではない。法然が本願念仏の教旨を自証されたときに既に三重の選択はなされているのである。

『三部経釈』や『選択集』の所説は自証の本願念仏の教旨を組織的に理論化されたものである。

この法然の自証した本願念仏なるものは上記のごとく無師独悟のものであって、源信及び永観、珍海等の説く念仏、並にこれらの諸師の見た善導とは異なるものである。しかしながら法然が自証した本願念仏こそ善導の本意であり、阿弥陀仏の真意であるという強い確信をもたれるに至ったのは夢定中における半金色の善導との対面という靈感（啓示）によるのである。但に善導の著作によって本願念仏を自証されただけでなく、これは夢定中の対面という靈感（啓示）に裏付けされた自証であって、ここに法然浄土教の特質を見ることができるといえる。

- 1 観経疏散善義（浄全二卷五五頁）
- 2 「有云」、「有師云」とあるは善導の説であるとするのは良忠の往生要集義記である。今は良忠の説によって善導とする。
- 3 往生大要抄（法全五二頁）
- 4 往生要集義記第五（浄全一五卷二八七頁）
- 5 往生要集義記第七（浄全一五卷三四五頁）
- 6 恵心教学の基礎的研究（八木晃恵著、西方懺悔法に関する研究（佐藤哲英著、竜谷大学論集三三八号）等
- 7 佐藤哲英著西方懺悔法に関する研究（竜谷大学論集三三八号）
- 8 これは定善義か、観念法門に説く浄土の解説文の取意でないかと思う。
- 9 興福寺奏状（新・日仏全六一卷一四頁）
- 10 法然上人伝の成立史的研究所収の四卷伝、琳阿本、古徳伝、九卷伝、四十八卷伝の説による。醍醐本法然上人伝記では真言宗をうけるという（第一卷三二頁）
- 11 浄土法門源流章（浄全一五卷五九一頁）
- 12 醍醐本法然上人伝記（法伝全七七三頁）
- 13 徹選択集（浄全七卷九四頁）
- 14 観念法門（浄全四卷二三三頁）
- 15 往生礼讃（浄全四卷三七六頁）
- 16 観経疏玄義分（浄全二卷一〇頁）に「発四十八願一願言若我成仏十方衆生称我名号願生我国下至十念若不_レ生者不_レ取_二正覚_一今既成仏」の文あり、良忠は伝通記六（浄全二卷二〇二頁）に「別孝第十八願二者以願王_ニ故」と釈している。